

2010年は1月12日のハイチの大地震対応に始まって、10月中旬に発生したコレラ対応に終わった。12月になっても崩れたままの首相官邸周辺の広大な公園にはブルーカラーの被災者テントが密集している。日中は道路沿いに小さな商いの店がびっしりと並び、多くの人たちで混雑し不思議な活気で満ちている。しかし、水道、下水道や道路などの社会インフラの復興・整備は全くできていない。首都でのコレラの爆発的流行は時間の問題であると感じた。

ハイチの不幸は三つのキーワードに象徴される。生態系の破壊、汚職そして国際政治の最前線、である。生態系の破壊は空から見れば一目瞭然である。隣国のドミニカ共和国の緑の山とハイチの褐色の山の違いであ

る。ドミニカ共和国の3分の2は緑の国立公園である。一方、ハイチの山には木がない。木炭として切り払った。一族郎党を養うために汚職で肥えた裕福層の多くは米国やフランスなどの海外に住んでいる。09年1月にオバマ大統領がヒラリー・クリントン氏を国務長官に任命する際、ハイチに

関する担当も合わせての任命であったこと、09年6月にはビル・クリントン元米大統領が国連ハイチ担当特使に任命されていること、理由が、現地に行ってみてよく理解できた。キューバは、チャベス大統領率いるベネズエラからの政府補助金で値引きされた石油と交換に、ベネズエラをはじめ

に、アフリカ諸国に2000人に上る医療要員を派遣しているといわれる。ハイチでも、キューバの医療チームが多くの自治体病院で活動していた。12月7日より、ハイチ保健省から指定されたフ

オンデネグ市の救世軍病院(首都・ポルトープランスから南西110キロ)にコレラ対応医療支援に赴いた写真。6名の医師のうち4名がコレラ治療の研修を受けていたが臨床経験はなかった。2週間前から16名のコレラ患者を治療。6名が入院していた。翌朝には3名の地域住民が真剣な表情で病院の管理者に訴えていた。「2日前から10名の村人がコレラで死亡。早急に対策をしてほしい」と。毎日2、3名のコレラ患者が入院してきた。病院に来るのが遅れて重症の脱水症のために死亡する患者が相次いだ。地域住民がコレラと普通の下痢との区別がつかなかったためである。私もコレラ患者の治療は初めてだったが、次の5原則を守ればコレラ対応医療は大丈夫と確信した。

ハイチのコレラ対応医療支援

飲料水の確保
—である。

さらに重要なことは、ハイチの人たちにとってコレラはハイチの歴史始まって以来の経験だという事実である。次の3点に留意する必要がある。

①医療スタッフがコレラ治療の経験なし②地域住民がコレラ予防の衛生知識なし③飲料水用の井戸が6戸の浅井戸で水系感染の可能性が高い。

結論は「WHO(世界保健機関)やユニセフ(国連児童基金)などの国連機関、USAID(米国民間開発庁)などの国際機関、そしてハイチ政府保健省と密接な連携をもとにしたコレラ治療センターの設立運営に



療センターの運営は最低でも半年以上の継続を求められる。募金だけではその設置と運営は無理である。他団体との連携や政府資金の活用などを検討する必要がある。コレラ流行はハイチ地震復興の大きな障害となってきた。

AMD Aは復興支援として義足支援プロジェクトとスポーツ親善などの総合的対応なしには交流プログラムを実施してきた。コレラ対応医療支援も視野に入れた長期対策として、AMD Aのインドなどのコレラ対応している。今後とも皆様方のご理解とご支援をお願いします。(AMD Aグループ代表)